KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

白樺派・里見弴の一人称小説の地の文における人称代名詞：志賀直哉との比較から見える特徴

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2021-03-29 キーワード (Ja): 里見弴, 一人称小説, 人称代名詞, 俺, 「無題」 キーワード (En): 作成者: 安井, 寿枝 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/00007963

関西外国語大学 研究論集 第113号（2021年３月）
Journal of Inquiry and Research, No.113（March 2021）

白樺派・里見弴の一人称小説の地の文における人称代名詞

── 志賀直哉との比較から見える特徴 ──

安　井　寿　枝

要　旨

本稿は、『白樺』創刊メンバーである里見弴に注目して、一人称小説の地の文において、どのような人称代名詞が使われているかを分析したものである。白樺派の一人称小説については、「自分小説」といわれるように「自分」を使うのが特徴だが、里見は「自分」をいっさい使っていないのが特徴である。里見が使っている人称代名詞は、「私」「俺」「予」「僕」「わたし」「あたし」であり、「私」の使用がもっとも多い。「私」が使用されているものは、語り手が過去を回想する自叙伝的な小説であり、過去の自分自身を客観的に描き出すために、「私」が選択されており、「私」以外の人称代名詞が使われている「荊棘の冠」や「喜代女日記抄」は、自叙伝的な小説とはいえず、『白樺』以前の一人称が作者と別人の一人称小説と同じである。一方「無題」は、「俺」という人称代名詞を使うことで、里見自身の内面を赤裸々に表現することに成功した唯一の一人称小説だといえる。

キーワード：里見弴、一人称小説、人称代名詞、俺、「無題」

１．はじめに

本稿では、地の文に自称の人称代名詞が使用され、その人称代名詞を使用している人物によって語られている、あるいは書かれていると予想されるものを「一人称小説」として扱う。日本語の自称の人称代名詞は、「わたくし」「わたし」「ぼく」「おれ」のほか、方言も含めれば「うち」「あて」「わし」など多様であり、人称代名詞の種類が多いことが日本語の特徴である。中でも、一人称小説においては「私」がもっとも多く使用されており、その中には「私小説」といわれるものがある。講談社刊行『日本近代文学大事典』（1977）の「私小説」の項（猪野謙二著 pp.539-542）には、次のようにある。

> わが文壇に「私小説」という呼称があらわれたのは大正九、一〇年の交、はじめは「所謂『私小説』」（加藤武雄）とか「私は小説」（近松秋江）とかの不安定な言葉で、かなりいわば自然発生的に生み出されたものである。（p.539）

さらに、『日本近代文学大事典』には、久米正雄の『私小説と心境小説』を引用しながら、大正13、14年以降の私小説について、次のように書かれている。

> 「心境小説」にまで昇華されることによって、はじめてたんなる「告白」や「懺悔」と界線を画した「芸術の花冠を受くるもの」となり、巷間「人生の紙屑小説、糠味噌小説、乃至は単なる惚気、愚痴、管に過ぎぬ」などといわれる私小説の類とはまったく異質なものとなる、としたのである。だが、ここには同時に、それ以前の自然派、「白樺」派その他の小説ではまぎれもなくその中核をなしていた、とくに封建的な道徳習俗に対する自覚的な個性の働きかけといった小説の内容の問題や、これと結びついた創作技法上の問題から転じて、これをもっぱら「『私』をコンデンスし云々」といった作家の「心境」の錬磨とその「もっとも直截」な、いわば非構造的な吐露とに賭けてゆく、あらたな「心境小説」という一種変態的な小説への方向が打ち出されていることが注目されなければならない。(p.540)

また、宇野浩二（1925）は、「「私小説」の元は私は白樺派ではないかと考へてゐる」(p.18)と述べている。そして、田山花袋以来「私」がもっとも多く使われるようになったのに対して、「白樺派の人たちは申し合せでもしたのか、「私」といふ言葉を汚れ物のやうに忌避して、「自分」といふ言葉を慣用し出した」(p.19) としている[1)]。宇野（1925）は武者小路実篤を例に述べるが、白樺派である志賀直哉も「自分」を好んで使用している（遠藤好英（1972・1983）・下岡友加（2005・2016）・西崎亨（1996）など)。一方で、志賀の友人で『白樺』創刊メンバーである里見弴の一人称小説について言及したものは、管見の限り見られない[2)]。そこで、本稿では、人称代名詞の使用から里見弴の一人称小説の地の文における人称代名詞の特徴を、志賀直哉の使用と比較しながら示したい。

2．使用されている人称代名詞

筑摩書房刊行『里見弴全集』全10巻（1977-1979）における一人称小説は、20作品であった。地の文における一人称代名詞の使用をまとめると、次頁の表１のようになる。この中で、地の文において「私」を使用しているものは17作品ともっとも多く、残り３作品は「私」以外の人称代名詞を使用している。当時の一人称小説は「私」を使用することが多かったため、この結果は妥当といえる。一方で、「私」以外の人称代名詞を使用することには、何かしらの意識が働いたといえるのではないだろうか。

地の文で「私」が使用されていた17作品の中で、「喜代女日記抄」は「私」以外に「あたし」

表１　里見弴・一人称小説の地の文における人称代名詞の使用

作品名	初出	一人称代名詞
お民さん	1908	私
入間川	1991	私
君と私	1913	私
夏絵	1915	私
無題	1916	**俺**
或る年の初夏に	1917	私
朴の歌留多札	1917	私
一目惚	1918	私
桐畑	1920	私
最初の泊	1926	私
小暴君	1926	私
荊棘の冠	1934	**俺・予・僕** **わたし**
T・B・V	1937	私
若き日の旅	1940	私
休日	1942	**わたし**
自惚鏡	1948	私
内証事	1948	私
二人の作家	1950	私
かツぽれ	1956	私
喜代女日記抄	1963	私・**あたし**

も使用しており、他の16作品は「私」のみを使用している。一方、「私」を使用していない「無題」「荊棘の冠」「休日」では、「俺」「予」「僕」「わたし」[3] が使用されている。注意を要するのは、『白樺』の創刊メンバーであるにも関わらず、「自分」という人称代名詞をいっさい使用していないことである。先にも引用したとおり、宇野（1925）によれば、白樺派は「自分」という言葉を慣用している。にもかかわらず、里見が「自分」をいっさい使用していないのは、『白樺』の同人、とくに友人である志賀を意識しているようにも受け取れる。下岡（2016）によれば、志賀にとって「自分」という言葉は、「実生活上の自称として確立しつつあった」（p.5）とされ、「『白樺』発刊以降に発表された小説においても、「自分」を統一的主語として」（p.5）いることが指摘されている。この「自分」＝作者とする志賀の表現が、里見の一人称小説の表現に影響を及ぼしたと考えられる。詳しくは、５章で後述する。

また、一人称小説の地の文においては、発話文と異なり、人称代名詞を場面によって使い分けていないことも特徴である。つまり、「荊棘の冠」と「喜代女日記抄」以外の18作品は、地の文の中で一貫した人称代名詞を使用しているということである。しかし、語り手の発話文においては多くの作品で、聞き手との関係に応じて人称代名詞を使い分けている。たとえば、「入間川」の「私」は、見知らぬ若紳士に対しての発話文では「私」を、恋人に対しての発話文では「俺」を使用している。以下にその場面を引用する。傍線は、本稿筆者による（以下同じ）。

> 「もし〳〵」少し行つた所で、私は不意にうしろから呼びかけられた。今すれ違つて行つた三十二三の見知らぬ男が、私の方を向いて立つてゐる。よく裁つた背広を着た立派な若紳士だつた。
>
> 「私ですか」（一42）
>
> 「玻璃（がらす）でしたかなんでしたか、かう二枚合せて見ると」
>
> と女は両の掌を合せて、「診（み）て貰ひに行つた人の患（わる）い所なんか、ちやんと解つて了ふんで

すト」
「おツそろしいお婆さんだナ」
「それが貴方、そんなにお婆さんでもないんですツて」
「さうかネ、俺はまた入間川の鬼婆ツて云ふと、何かバカに語呂がいゝから、可怕(こは)い顔でもしたお婆さんのやうな気がするネ」（一44）

このように聞き手に応じた使い分けは、鈴木孝夫（1973）などに述べられているとおり日本語の人称代名詞の特徴であり、自然な使用である。その一方で、一人称小説の地の文において人称代名詞を使い分けていないのは、一人称小説の地の文を発話文と捉えた場合、聞き手となる読み手が場面ごとに変わることがないからであろう。見方を変えれば、地の文で人称代名詞が変わる場合は、聞き手以外の何らかの要因があるということである。

地の文で異なる人称代名詞を使用している「荊棘の冠」と「喜代女日記抄」に注目すると、「荊棘の冠」は、一人称代名詞の語り手が変わるために人称代名詞が変わっている。「荊棘の冠」は、「序―手帖からの抜書を以つて代へる―」「小幡宗吉の手記」「安宅保の備忘録」「おとめの日記」の4部構成となっており、「序」には志賀直哉の署名が付されているため、一人称小説としては3部構成である。小幡宗吉は「俺」、安宅保は「予」「僕」、おとめは「わたし」を使用しており、それぞれの人称代名詞が人物の特徴となっている。安宅保が「予」と「僕」を使っているのは、文体による違いである。「予」が使われている文には、「如し」「語らんとするに」「悄然として」があることから漢文訓読体だといえる。

小幡氏、意気銷沈、別人を見るが如し。予が××社の原稿拒絶に就いて語らんとするに先だち、悄然として返還を求めらる。（七402）
まだやつと四つか五つかぐらゐの時だつた、晩飯の支度が出来、僕も御馳走になるつもりで餉台(ちやぶだい)の前に坐り、箸を把りあげるばかりのところで、何が因(もと)だつたか憶えないが、五九ちやんがむづかりだし、奥さんがいろ〳〵言つて宥(なだ)めすかしても肯(き)かない。（七404）

片村恒雄（1990）は、森鷗外の「舞姫」で使われている「余」を例に挙げて、次のように述べている。

日本近代文学においては、新しい人物呼称であり、文学作品の創作における新しい方法の発見であったと言えよう。「舞姫」の主人公である「余」は、「太田豊太郎」という名を持つが、作者の分身とも言える主人公の自我の形成と挫折の過程を語るには、第一人称人物の視点による語りが最も有効であると作者は考えたのであり、第一人称人物の呼称として

雅俗折衷体の中に自称の代名詞としての「余」を使用したのであった。(p.53)

里見の「安宅保の備忘録」は、鷗外の「舞姫」のような「主人公の自我の形成と挫折の過程を語る」には当てはまらず、「木幡宗吉の手記」を受けて、小幡がいかに無礼な人物かを描き出そうとしている。そのため、木幡と比較して、自分自身がまともな人間であることを示す手段として、安宅は漢文訓読体で書いていると考えられる。「喜代女日記抄」は、明治43年11月3日から翌年2月18日までの牧野喜代女の日記を抜き書きしたという体裁で書かれている。「私」と「あたし」の使用は、次のようなものである。

十一月三日　(中略)そこらを書いた私と、読んでゐる今の私とがおんなじ人だとは、嘘としか思へないくらゐ不思議でならなかつた。(中略)……あ、いけない、思ひ出してもならないことを書くなんて、あたし、よつぽどどうかしてるわ。(九461-463)
十一月七日　(中略)どうした加減か、大きいお母(ツカ)さんと小さいお母さんとで、私の衣裳のことから、聞き辛いほどの言ひ合ひとなり、そのうち小さいお母さんがジロりと私の方を睨んで、どつちが好きかとお訊きになるので、ほんとは大きいお母さんの仰有る方が気に入つてたのだけれど、あたし、わかりませんわ、と言ふと、いやな子だね、自分の好き嫌ひがはつきりしないなんて、そんなこツちやアいゝ芸者衆にやアなれませんよ。(九463)

これらの使用を見ると、「あたし」が使われているときは、話しことばになっており、「私」と「あたし」の違いも、文体差といえる。この作品について里見は、「あとがき」の中で「死亡前一週間の入院前日まで細かに誌されてゐた一冊だけは、まるで必要に迫られる想ひで、慌たゞしく拾ひ読みしたが、彼女の、己の影をこの世に残し置きたい気持は、痛いほどよく嚥み込めた。」とあり、喜代女が実在したことがうかがえる。また、「私はその志を、本格小説に盛り込もうと企(くはだ)て、わざと日記そのものとは無縁のまゝ、しかも「日記抄」と銘けて、彼女の五十八年間を写し出さうとした」としているため、日記を抜き書きしたものという体裁ではあるものの創作だといえる。しかし、実際の日記であれば、話しことばが混在しているほうがむしろ自然であり、実在する日記の抜き書きであるという真実味を出すために「私」と「あたし」を混在させていると考えられる。

3．位相

「位相語」について、朝倉書店刊行『日本語大事典』(2014)の「位相語」の項(田中章夫著pp.72-73)では、代表的なものとして、「男女間の用語の差異、年齢層・世代の間の用語の対立、

あるいは、身分・階層による用語の違い、社会集団や職業分野による用語の変容など」(p.72)があげられている。本章では、その中で性差と職業分野に注目して、人称代名詞の使用を確認したい。

3.1 性差

人称代名詞の使用にもっとも影響しているものが、性差である。たとえば、小学館刊行『日本国語大辞典』(2000)では、「わたくし」「わたし」は男女ともに、「あたし」は女性が、「おれ」「よ」「ぼく」は男性が用いるものとされている。この使用は、里見の一人称小説での使用と同様であるが、「わたし」に男性の使用がなく、女性のみが用いているという点が里見の一人称小説の特徴となる。これには、文字から受ける印象が影響しているのではないだろうか。里見の一人称小説では、ひらがなの人称代名詞を女性のみが使用している。

3.2 職業分野

次に、一人称小説の書き手の職業を一覧にして職業分野について確認する。作品内に書き手の職業について明記されていないものは、予想されるものに分類し作品名に「？」を付記した。

「私」
　小説家…「君と私」・「最初の泊」・「T・B・V」・「若き日の旅」・「自惚鏡」・「二人の作家」・「かツぼれ」
　文学者…「或る年の初夏に」
　会社員…「入間川」？・「夏絵」・「桐畑」
　学生……「お民さん」？・「朴の歌留多札」？
　無職……「小暴君」？
　無職（老人）…「内証事」
　不明……「一目惚」
「俺」
　小説家…「無題」・「荊棘の冠」(「小幡宗吉の手記」)
「予・僕」
　会社員…「荊棘の冠」(「安宅保の備忘録」)
「わたし」
　芸妓……「荊棘の冠」(「おとめの日記」)
　お嬢様…「休日」
「私・あたし」

芸妓……「喜代女日記抄」

第一の特徴としては、小説家が多いことがあげられる。この中で、作中の「私」が「里見」や里見の愛称である「伊吾」と呼ばれている、あるいは他の登場人物名から「私」が里見だと考えられるものは、「君と私」「最初の泊」「T・B・V」「若き日の旅」「自惚鏡」「二人の作家」「かツぽれ」であり、「私」が使われている場合の小説家はすべて自分自身のことをモデルとしているものである。宇野（1925）は、当時の一人称小説について次のように述べている。

これ迄の一人称小説では、その一人称の人物と作者との間が、その小説に出て来る他の人物と作者ほどではなくても、可成り離れてゐたし、作者も離れようと心がけてゐたやうだつた。でなければ、一人称は一人称でも作者とは全く別の人であつたり、又は作者が構想上の都合で使つてゐるといふ程度のものだつた。詰り作者の態度は三人称の小説を書くのと同じ態度だつた。所が、今いふ白樺派の或小説では、はつきりとそれ等の一人称の人物が作者その人らしく書いてあるのに、私は驚かされたのである。（p.19）

里見が自分自身をモデルとして書いた一人称小説は、「自分」を使っていないことを除けば、白樺派の代表的な作風といえる。一方、同じ小説家でも「俺」を使う人物は、はっきりと里見だと分かるものはないうえに、「私」を使う人物にはない大きな特徴がある。「無題」の男は、精神が不安定で恋人を絞め殺し、「荊棘の冠」の木幡宗吉は、娘に暴力を振るうことから精神病院に入院している。このように、一人称小説で「俺」を使用する人物は、精神的欠陥を持つ小説家だといえる。佐久間鼎（1943）は、現代の人称代名詞について、「所属の階級のうちのあるものの対面上用ゐることが忌避されるやうな卑語と認められてゐるものもある。“おれ”とか“きさま”とかいふ語を用ゐないですます人も多からう」（pp.81-82）と述べており、「俺」は本来なら避けられるべき人称代名詞であることがわかる。しかし、「無題」や「荊棘の冠」では、次のように、一人称の語りの書き出しの１行目から「俺」が使われており、読み手に対して書き手の精神的欠陥を暗示させる効果を持っている。

「無題」

――帳面の紙三枚破毀、並に数行の抹殺あり。次に――

……たうとう俺（おれ）はその事を成し遂げて了つた。注意深く手を拭いた手巾（はんけち）は丸めて袂に入れた。……手早く着物を着直して、部屋の隅に畳んで置いてあつた夏羽織をひつ掛けた。それから極めて平静に薄暗い梯段を下りた。階下ではかみさんが肌ぬぎになつて内職のミシンをガチ〳〵踏んでゐた。（一309）

「荊棘の冠」

……そんなことはない。あれは、立派に、名実ともに俺の子だ。自分で勝手に幾子だの維久子だのと書くので、世間にはそんな風に伝はつてゐるか知らないが、戸籍面は五九子で、大正五年の九月生だから、憶えよく、簡単に俺がさうつけたのだ。戸籍上俺の一人娘であることは無論だし……。(七338)

会社員が使用する「私」と「予・僕」との差異に注目すると、「予・僕」を使う安宅保は、木幡宗吉の娘のパトロンを頼まれるほどの金持ちであり、階層差があるといえる。『日本国語大辞典』には、「予」を使う人物は、「やや尊大な表現として用いられた」とあり、漢文訓読体を用いていることからも、尊大な人物が表現されていると思われる。一方で、女性では、芸妓もお嬢様も「わたし」を使っていることから、階層差は見られない。芸妓を妻として迎えている里見には、芸妓もお嬢様も同じ女性といえるのかもしれない。

4．時間

里見に限らず、多くの一人称小説は、語り手の過去の体験を回想する形で書かれている。「わたくし」は、佐藤稔（1983）によれば、江戸時代に入ってから、「男性の場合は改まった態度で言う時のものである」(p.337）とされる。この改まった態度が、過去の自分自身を客観的に描き出すために有効だったといえる。一方、里見の一人称小説では、「俺」を使用する場合、過去の回想に加えて、いまここで起こっていること、いまの語り手の声がそのまま書かれている部分が他の一人称小説と異なる。以下が、その叙述である。

「無題」

こゝまで書いて了へばもう安心だ。今階下の便所に下りたら帳場に妙な奴がゐた。俺の自由ももう数十分のうちらしい。しかし自由がある限りは書き続けよう。書けさへすればまだ書きたいことも残つてゐる。もう一つは、何故俺が最愛のお吉を殺さなければならなかつたか、その根本の解決だ。慥かに周囲の事情ばかりではない。俺には解らない。気が急(せ)いて考へてみる気にはなれない。それにはお誂へだ。俺は多分今後のたくさん暇(ひま)な、暇過ぎる時間を有つだらうから。

もう一つ、是非これは書いて置かなければならないことが出来た。今この瞬間に出来た。

それは、俺は今、お吉を殺した俺を、心から憎む！　多分今後一生涯憎まなければならないだらう！　俺は悪党だ！　少くとも、骨の髄まで染み込んだエゴイストだ！　そして今この瞬間に、俺はあらゆる心の力を集めて、あらゆる意味と強度とに於ての、総てのエ

ゴイズムに呪をかける！　俺は大嘘つきだつた！　お吉なんかちつとも愛してはゐなかつた！　愛してゐたのは自分ばかりだつた……。

足音が来る、――いま！　左の手はその貴い自由を失ふ。――振り向きもしずに書いてゐると、なんだ、読んでやがるな？　――来た〳〵、昨夜から五時間萬年筆を握り続けてゐた光栄ある右の手へも――もう……。（一327-328）

「荊棘の冠」「小幡宗吉の手記」

早い話が、お前があれに何をしてやつた。いろ〳〵言ふだらう。いくらでも言ふがいゝ。だが、お前のあれにしてやつたことは、お気の毒だが、せい〳〵他人でしてやれることの限度いつぱいだ。それ以上、お前に一歩でも踏み出せたか。

踏み出せないお前が健康体で、踏み出した俺を気違（きちがひ）だと言ふが……。

まア待て、だん〳〵に言つて聞かしてやる。こゝにゐて、これほどはつきりした気持でものを書いてゐる俺が気違か、よつてたかつて、無理やり俺をこんな病院に監禁してしまやアがつたお前たちが気違か、――そんな呼び名は、どつちがどつちでもいゝとして、正しい相（すがた）でものを観なほさせてやらう。お前たちはとにかく、五九子にだけは、さういふ視力を養はせなければならない。（七339）

そこで話をもとに戻すと、さうしないつもりでゐながら、いつの間にか五九子を天才扱ひにし、気がつけばさういふ自分自身に腹を立てるし、気がつかないでゐる間は、娘の天分に対する嫉妬（やきもち）で苛つく、――さういふ俺だ、と反省したのだ。五十面さげての反省、と前に言つて置いたのは、結局こんなことになるのだが、今これを書いてゐる俺は、それだけが全部ぢやアない、さう簡単に片づけられてたまるもんか、と苦々（にが〳〵）しく思つてゐる……。（このところ、言葉だけでさらに実感なし、抹殺すべきなれど、あたまの労れ工合を見る参考として、暫く生かし置く。――後記）（七381-382）

前の部分を書いてからもう半月あまりになる。（七382）

五九子の手頸もかれこれ全治、ぽつ〳〵自習を始めてゐる。――それにつけても、これから俺は、一体何を始めたらいゝのか。何かする気は、日一日と、だん〳〵肚の底に強まつて来てゐる。何かやる。必ず何かやつてみせる。――でもまだ、どこへどう手をつけていゝのか、はつきりして来ない……。（七384）

このように、「俺」を使用するのは、自分自身を客観視できていない表れといえる。その他、「予・僕」を使用する「安宅保の備忘録」は備忘録、「わたし」を使用する「おとめの日記」「休日」や、「私・あたし」を使用する「喜代女日記抄」は日記であり、過去の出来事を回想して書いているものの、出来事が起きた日と同日に書かれているというのが特徴であろう。「私」が使用されている作品では、過去の出来事から数年を経てから書かれたものが多い。宇野（1925）は、

次のように述べている。

> 私が「私小説」と「心境小説」と同じものと見ながら先に「私小説」を「心境小説」の元と書いたのは、後者は前者の進歩した形であると見られるからである。初心な読者のためにいつておくが、「私小説」とはいふものの「私」といふ一人称で書いた小説に限らないのである。自叙伝的な小説といふ意味にとつてもいゝ。(p.20)

宇野（1925）に倣えば、里見の「私」を使った一人称小説は、自叙伝的な小説であり、まさに「私小説」である。その中で、「私」以外の人称代名詞が使われている「荊棘の冠」や「喜代女日記抄」は、自叙伝的な小説ではなく、『白樺』以前の一人称小説と同じだといえる。

5．随筆および志賀直哉宛書簡から見る意識

里見は志賀に劣等感を抱いていたといわれている[4)]。里見の随筆「銀語録」には、次のように志賀など年長者に対する意識が書かれている。

> 背丈（せたけ）の違ふ者と、正面（まともも）に顔を向き合せて話さうとするには、低い方は、勢（いきほひ）、せい伸びをするか、踏台でも支（か）ふよりほかないのと同じで、私は、しよつちゆう心理的なせい伸びに、無理から無理が重つて、遂にはどこかしらに破綻を生じる——ぼろを出す。そのぼろこそが本音で、不断は出来すぎか、附焼刃か、知つたかぶりか、なんにしても碌なもんぢアない、といふことを、はつきり相手に知らせて了へるだけの肚（はら）が出来てゐたら問題はないのだけれど、二十歳（はたち）を出たばかりの生意気盛り、敗惜みの強い絶頂だから、七顛八倒の苦しみで、なんとかその破綻を彌縫しようとする。さうなるともう、嘘もごまかしも手段を選ばず、どうにか一時は糊塗できるが、もとよりその結果は、最初のぼろを、更に何層倍か醜くするだけの話で、これが、「墨汁五合」になる種（たね）の一つだ」（十250）

そして、このように苦しんでいた里見にとって、『白樺』創刊は、「浮袋（ライフ・ブイ）」（「銀語録」十252）になった。そんな『白樺』に「自分」という一人称代名詞を使った作品を発表しては、結局志賀の模倣になると考えたのではないだろうか。志賀が作品内で使用する人称代名詞については、下岡（2005）に詳しく、自称の人称代名詞では「自分」「私」「僕」「俺」があり、中でも「自分」と「私」は、とくに使用頻度が高いとされている。「私」は、『白樺』以前の一人称小説でも多くの作家が用いていたものであるため、志賀の独自の表現は「自分」である。このことから、里見は志賀の跡を追うことを拒否し、「自分」をいっさい使わなかったと考えられる。

また、志賀直哉宛書簡において里見は、「僕」をもっとも多く使用しており、武者小路や有島生馬なども志賀宛書簡において「僕」をもっとも多く使用していることから、彼らの日常の一人称代名詞は「僕」だったと考えられる[5)]。しかし、一人称小説の地の文で「僕」を使っているのは「荊棘の冠」のみであり、3章で確認したとおり、語り手である安宅保は里見をモデルにしているとはいえない。『白樺』の特徴ともなった自叙伝的な小説を書くには、「僕」ではなく「私」を使うことが望ましいと考えたのだろう。それは、志賀との「永年のずる〳〵べつたりズムから蝉脱するために」「懺悔録」「遺書」のつもりで書いた[6)]「君と私」において、「私」が使われていることからも推測できる。ただし、この「君と私」は、真の懺悔にならなかった。1913年7月2日に志賀に宛てた手紙には、「君と私」について、次のように書いている。

> 僕は自分の秘事をサラケ出すことによつてモデルの迷惑を購ふやうな心持で居た。「己はこんな迷惑まで忍んで居るのだから君たちも少し位なことは心棒してくれてもいゝだらう」と云ふやうな心持があつた。そのくせあの小説で一番迷惑を着なかつた者は僕であつたかも知れない。必竟僕は他人の迷惑などを考へないエゴイストだつた。(117上段)

この手紙を読む限り、「君と私」は、『白樺』の特徴といわれているような心境小説にはなりえず、また、未完で終わっていることからも里見にとっては失敗作といえるだろう。その後、里見はこの失敗を活かし、今度は三人称小説である「善心悪心」で劣等感も含めた自身の心境の吐露を行おうとしたとみられる。しかし、この「善心悪心」で書いた、心境の吐露が志賀との絶交を決定的にした。ただし、この絶交は志賀からの一方的なものではなく、「善心悪心」発表前に書かれた1916年5月20日の手紙からもわかるように、里見自身も望んでいたことであった。そして、里見が志賀との没交渉を決意した原因の一つに、妻であるおまさの存在があったと見られる。

> 愈〻我孫子に住むでから僕なりおまさなりが度〻君たちや柳君夫婦やを不快にすることでもあると大変困る。おまさのことは出来るだけ僕が注意するとしても僕がちつとも知らない間に君や他の人たちにも無礼をしてゐたことを知つてみると第一に僕自身が不安なものになる。／丁度古から親しくした友達が近頃（僕だけでさう思ふのか知らないが）僕と遠ざかつて来た今の場合を機として君の僕には受けきれない好意友情をも御断りしたいと思ふ。(149下段)

わざわざここで、おまさの名前を出すということは、それなりの理由があったと想像される。そして、このおまさを殺すという虚構を描いたのが「俺」を使用した一人称小説「無題」である。

里見がおまさと東京で世帯を持ったのは1915年12月だが、それ以前に大阪で二人は一緒に暮らしていた。しかし、その生活は必ずしも幸せではなかったと考えられる。1914年５月27日の手紙には、体調のすぐれないおまさのことを「蔭気顔」と表現し、「今の生活は決してよくない」と述べている。おまさは、同年７月に長女・夏絵を生むため、５月27日といえば、もう出産間近という時期であり、自身の子がもうすぐ生まれるにしては暗い表現である。里見自身もそれを思い直したようで、同年６月10日の手紙で「前の手紙で僕は余り自分のことを逆境に書き過ぎたやうな気がする」と書き、「母親と姉とのみにくい金銭上の争ひ」に巻き込まれていることを「実際一番あわれなのはおまさだ」としている。同年６月28日の手紙でも「産ももう十日以内だろうと思つて居る　兎に角何より早く産れて欲しい　さうすれば気分が一変して元気になれさうに思ふ　今の生活は早く変へたい生活だ」と願っていた。そして、７月に夏絵が生まれ、これから事態が好転するかと思いきや、９月に夏絵が夭逝する。里見は９月20日の手紙で、このことを「僕等には生れて肇めての不幸が来た　夏絵が死んで了つた　危篤と云ふ電報で不安の裡に下阪したが間に合はなくて既に相（ソウ）の変つた（大きくなつた）顔を見る運命だつた　自分がそばにゐたらと云ふ心が仲〻諦め憎くさせた（何しろ消化不良と云ふのだから）」と書いている。さらに、この頃の心境は「夏絵」にも書かれている。以下に引用する。

> 嘘はないとしても大分ボロ隠しがある。医者も無責任極（きは）まつてゐるが、大体母親とおしげの注意が大変悪かつたやうだ。殊におしげは、側に死んでゐるのも気が附かずにゐるとは……私はジリ〳〵と益々腹が立つばかりだつた。（一299）
>
> 「若し俺が側にゐたら、かう他愛なく殺しはしなかつたらうがなア」私はかう云つて嘆かずにはゐられなかつた。それを聞くとおしげの小さな哀むべき心には、自分の不行届が取り返しのつかない大罪のやうに思はれて来た。
>
> 「ほんまに私が殺したやうなもんだす……」
>
> 　仕舞にはかう云つて泣いた。私はすぐ心から可哀想になつて、「そりゃ寿命と云ふこともあるから……」などと、いかにも自信のないアヤフヤな態度で宥（なだ）め慰めなければならなくなつた。注意は必要だつた。しかしお前が殺したわけではない。今後はよく気を附けてくれ、――さう云つた。（一302）

手紙や「夏絵」を見る限り、里見は夏絵の死を、おまさのせいだと考えていることがわかるが、この後の里見はおまさを責めることなく、むしろおまさと東京で世帯を持つことに邁進する。「夏絵」には、夏絵の死を運命と受け入れ、「運命の許す限り私はそれをよりよく善く、よりよく高く持つて行かなければならない。私の一生とおしげのそれとを結ばうと云ふ決心も益々堅くなつた」と述べている。もちろん、これも本心だろう。しかし、子供を亡くした気持ちは簡単に消化で

きるものではなかったのではないだろうか。それが「夏絵」の次に発表された「無題」に表されていると考えられる。「無題」について里見は、「「題のない小説」が生れた動機」（『朱き机に凭りて』）において、次のように書いている。

> 大正四年の十二月に、いろ〳〵な苦しいごた〳〵揚句、漸く今の妻を携へて、私は大阪から東京へ出て来る事が出来た。（254）
>
> 前に云つたいろ〳〵なごたつきの間、本当に純一だつたと云つてもいゝ迄に日夜昂奮し続けて居た私と、妻の昂奮の度合に、可成りな隔たりが生じて来た為め、胸を掻き毟り度いやうな、もだ〳〵した癇癪の揚句、時には本当に叩き殺してやらうかと思ふ事があつた。それは勿論憎みから殺すのではなく、深く愛するから殺し度くなるのだつた。若し私が殺してしまつたとしたら――このシチュエーションに自分を置いて、前年の書きかけを役立てながら、五日程で書き上げたのが、あの題のつけてない小説だつた。（256-257）

このように、夏絵の死をきっかけに、隔たりの生じたおまさへの殺意から書かれたのが「無題」である。そして、この「無題」において、里見は初めて一人称小説の地の文に「俺」を使用した。

志賀の作品における「俺」の使用は、「挿話」1作品のみであり、その使用について、下岡（2005）は「この作品では退役軍人である「俺」により戦時上での体験が明かされているのだが、同期生の言動に「我慢し切れなくなつて、いきなり横面を力まかせに撲つてやつた」と自ら語るような語り手の性質が、その自称「俺」を選ばせたものと考えられる」（p.18）と説明している。このような「俺」という人物の横暴さは、里見の「無題」「荊棘の冠」の「俺」を使う人物と共通するものであり、先にあげた佐久間（1943）に述べられている「俺」という人称代名詞の特徴から導かれるものであろう。一方、それぞれの作品の初出に注目すると、志賀の「挿話」は1922年、里見の「無題」は1916年であり、里見が志賀の「挿話」に影響されて「無題」を書いたとは考えにくい。おそらくは、殺人を犯した人物という位相から「俺」を選択したのであろう。しかし、「俺」を使用したからこそ、「君と私」では成しえなかったありのままを吐露した心境小説が可能になったと思われる。先の随筆でおまさへの殺意は、「勿論憎みから殺すのではなく、深く愛するから殺し度くなる」と述べているが、「無題」では「俺は唯、どんなにお吉を愛してゐたか、また今も愛してゐるか、それが書いて置きたかつたのだ」（一316）と書いていた「俺」は、4章で引用したとおり、最後に「お吉なんかちつとも愛してはゐなかつた！」と自身のお吉への愛情を否定している。さらに、注目すべきは、自身をエゴイストとして、「総てのエゴイズムに呪いをかける！」と書いていることである。「君と私」について弁解した、前述の手紙で里見は「必竟僕は他人の迷惑などを考へないエゴイストだつた」と述べている。また、この手紙をきっかけに、大阪に家出をする。里見は以前から、ずるずるべったり

の関係である志賀との距離を取りたかったが、なかなか叶わなかった。家出という形で物理的に距離をとることができたのは、この「君と私」をめぐる志賀とのやり取りであろう。そして、大阪から初めて出した志賀への手紙（1913年10月20日）は、「今日は俺から先へ書く」から始まる。この一文はまさに志賀への挑戦状のようであり、志賀宛書簡で「俺」を使うのはこれが初出となる[7)]。そのような人称代名詞である「俺」を使用した「無題」は、「君と私」で自己を曝け出すことのできなかった里見が、夏絵の死をきっかけに、芸妓であったおまさへの本心[8)]と、そんなおまさと周囲の反対を押し切ってまで結婚した自身の矛盾を洗いざらい曝け出した作品だといえるだろう。

6．おわりに

以上、人称代名詞の使用から里見弴の一人称小説の特徴を確認した。まず、人称代名詞の種類としては、「私」「俺」「予」「僕」「わたし」「あたし」が見られ、「私」の使用がもっとも多いことが確認された。さらに、「私」を使用する作品の多くは、里見自身をモデルとしたものであり、いわゆる「私小説」であった。また、「私」が使用されている一人称小説は、語り手が過去を回想する自叙伝的な小説であり、過去の自分自身を客観的に描き出すために、「私」が選択されたといえる。一方で、「俺」「予」「僕」「わたし」「あたし」を使用している「荊棘の冠」や「喜代女日記抄」は、里見をモデルにしたと明確にわかるものではなく、語り手が過去の自分自身を客観的に描き出したものとは言い難く、一人称が作者と全く別人であった白樺派以前の一人称小説へと回帰しているものである。さらに、里見の一人称小説においては「自分」という人称代名詞が使用されていないのが特徴である。これには志賀への対抗意識が影響していることを述べた。一方で「無題」は「俺」を使用することで、「君と私」では成せなかった里見自身の醜さや自己矛盾をありのままに書くことに成功した作品だといえる。大西貢（1998）は、「無題」について、「志賀直哉が、『過去』で《千代》の事を描いた以上の描き方で、結果的に《お吉》との関係及びその姿を徹底的に醜い面をも含めて描いた」（p.35）と述べている。彦坂佳宣（1983：172）によれば、二葉亭四迷の『浮雲』、尾崎紅葉の『金色夜叉』、森鷗外の『青年』では、「おれ」が独白の場合に使われていることが指摘されており、里見は、このような「俺」という人称代名詞を「無題」において選択することで、「自分」を多用した『白樺』の同人とは一線を引いた一人称小説を書くことに成功したのである。

※　本稿で里見弴の作品および随筆を引用するにあたっては、筑摩書房刊行『里見弴全集』全10巻（1977-1979）を使用した。全集に収められていない随筆は、『朱き机に凭りて』（金星堂、1921年）を使用した。また、志賀直哉宛書簡は、岩波書店刊行『志賀直哉全集別巻』

（1974年）を使用した。いずれにおいても、旧かな・ルビ・傍点は原文のママとし、旧字・異体字は新字体に改めた。引用には括弧の中に、全集の巻数を漢数字で、ページ数を算用数字で示した。

注

1）近代の小説に使われている「自分」については、遠藤好英（1983）に、「二葉亭四迷の翻訳小説の後を受けて、明治期には嵯峨の屋御室・高瀬文淵・国木田独歩・田山花袋・島崎藤村等の作品に見られるのである。大正期に入っては寺田寅彦・夏目漱石・鈴木三重吉等の小説に加えて、漱石門下の人々の、多く『ホトトギス』に発表された評論文にも「自分」による文章が指摘され、武者小路の小説を中心とした白樺派の作品に多いことへとつながるのである」（p.189）と触れられている。

2）里見弴の文体については、拙著（2009）において大阪方言が使われている作品の自称詞・対称詞・尊敬語について総覧した。

3）「私」についてはルビがないため、「わたくし」と読むか、「わたし」と読むかが問題となる。現行の「常用漢字表」（2010年11月30日告示）では、「私」の読みは「わたくし／わたし」とされているが、本稿では「私小説」に倣い「わたくし」と読むことにした。そのため、「私」以外の人称代名詞にひらがな表記の「わたし」を含めている。

4）松村定孝（1956）・大西貢（1996）など。

5）『白樺』創刊のメンバーであり、里見の兄である有島武郎の志賀宛書簡を見ると、「私」を用いて丁寧体で書かれている。志賀より有島武郎のほうが年上であるため、これらの使用には、志賀との距離が感じられる。

6）「銀語録」による。

7）志賀直哉宛書簡に登場する「俺」は、この1913年10月20日の書き出しと、志賀に没交渉を求めた1916年５月20日の２例のみである。1916年５月20日の手紙での使用は、「さう云はれゝば近頃僕は段〻古い友達からのけ者にされるやうな傾向は気がついてゐた。然し僕は今までそれが僕の礼儀を無視する所から起つてゐやうとは夢にも知らなかつた。俺は礼儀と云ふことは特別に注意もしなかつたが礼儀のない人間は僕も大嫌だ。」である。この手紙には、自己弁解が多く「僕」が多用されている。その中で、唯一ここで「俺」を使ったのは、志賀を含めた古い友達への対抗意識を表現したように見受けられる。

8）大西（1997）は、里見が芸者との結婚に踏み切ったことを「根本的には、志賀直哉への当てつけと、挑戦ではなかったか」（p.22）として、「《山中まさ》と結婚しなければならない必然性が無いにも拘らず、意地を張って、結婚しようとしたので、もともと《山中まさ》に、それ程の魅力がないが故に《おしげ》の女性としての魅力を描きたくても描く事が出来なかったのではないであろうか」（p.37）と述べている。さらに、大西（1998）によれば、「里見弴にとって、命賭けとも言い得る努力をして、周囲の反対を押し切り、周囲を納得させて、結婚はしてみたものの、いざ結婚生活に入ってみると、理

想と現実との間には、予想も出来ない困難と隔たりとがあったと想像される」と述べている。

引用文献

宇野浩二「『私小説』私見」『新潮』43（4）、1925年、18-23頁
遠藤好英「白樺派の文章史的考察（上）―自分小説の創始をめぐって―」『文芸研究』70、1972年、48-58頁
遠藤好英「自分」『講座日本語の語彙』第10巻、1983年、185-192頁
大西貢「志賀直哉と里見弴との間柄」『愛媛大学法文学部論集　人文学科編』1、1996年、1-42頁
大西貢「志賀直哉と里見弴との絶交とその経緯（一）―『母と子』及び『晩い初恋』の成立過程―」『愛媛大学法文学部論集　人文学科編』3、1997年、1-41頁
大西貢「志賀直哉と里見弴との絶交とその経緯（二）―『夏絵』と『題を附けない小説』との成立過程―」『愛媛大学法文学部論集　人文学科編』4、1998年、1-38頁
片村恒雄「文学作品の中の呼称―近代―」『日本語学』9（9）、1990年、52-58頁
佐久間鼎『日本語の言語理論的研究』三省堂、1943
佐藤稔「わたくし」『講座日本語の語彙』第11巻、1983年、335-339頁
下岡友加「志賀直哉の小説における人称―「自分」・「私」・「彼」のあいだ」『国文学攷』188、2005年、15-29頁
下岡友加「志賀直哉の作家以前―自分小説の誕生―」『国文学攷』228・229、2016年、1-12頁
鈴木孝夫『ことばと文化』岩波書店、1973年
西崎亨「一人称代名詞『自分』の記述的意味―志賀直哉作品の表現」『表現研究』63、1996年
彦坂佳宣「おれ」『講座日本語の語彙』第９巻、1983年、170-174頁
武藤康史「里見弴」『志賀直哉宛書簡集　白樺の時代』2008年、332-396頁
村松定孝「里見弴と白樺派―志賀直哉からの脱出を中心として―」『明治大正文学研究』18、1956年、48-57頁
安井寿枝「里見弴の小説に見られる関西方言」『語彙研究』7、2009年、48-55頁

（やすい・かずえ　外国語学部講師）